アイルランドから愛媛へ ～ご縁がつなぐ国際交流～

病院長　舩田 淳一



40歳になる頃、私は脂質代謝と動脈硬化研究の世界的拠点である英国オックスフォード大学に留学する機会を得ました。それから20年以上が経過した現在も、当時の上司や同僚との交流は続いています。

今回、その縁を通じて、アイルランド人医師Dr. Mc Quaidから、Marco Perez-Mackayさんの病院実習受け入れについて相談を受けました。アイルランドのダブリン大学医学部に在籍するMarcoさんは、5週間にわたる長期実習を希望しており、ご両親を交えたオンライン面談を実施しました。米国在住の腫瘍内科医である父親、アイルランドで小児精神科医として働く母親、そして私の3か国を結ぶ面談を経て、本人の強い意欲とご家族の理解を確認し、実習計画を立案しました。

当院だけでは十分な経験を提供することが難しいと考え、愛媛県立中央病院、愛媛大学医学部附属病院にもご協力をいただき、県内3病院での実習を実現しました。5週間はあっという間でしたが、Marcoさんは熱心に学び、県内の若い医師や医学生にとっても大きな刺激となったように思います。実習終了後、東京で米国医師国家試験の第一段階であるUSMLE Step 1を受験し、アイルランドへ帰国しました。将来はアイルランドだけでなく、米国や日本での医師免許取得も目指しているとのことです。その高い志と行動力に、私自身も大きな刺激を受けました。

20年以上前に始まった一つのご縁が、時を経て愛媛に新たな国際交流の機会をもたらしました。Marcoさんの将来の活躍を期待するとともに、この経験が県内の若い医療者にとっても世界へ目を向ける契機となれば幸いです。

国際学会発表

病院長
舩田 淳一

7月3日から5日まで、シンガポールで開催されたISCP(International Society of Cardiovascular Pharmacotherapy)2026に、循環器内科の宮崎医師と参加した。



写真①

会期中、私は「Sustaining Regional Cardiovascular Care in an Aging Society through Inter-Hospital Collaboration」と題し、近年進めている愛媛大学医学部附属病院心臓血管外科グループとの病院間連携について報告した。高齢化と労働力人口の減少が進むわが国において、効率的な医療連携は、地域医療を維持するためのモデルケースになり得ると考えている。宮崎医師は、心臓手術後における適切な薬物治療の必要性について、「Assessment of Disease-Specific Guideline-Recommended Medical Therapy in Patients Admitted for Cardiac Rehabilitation After Cardiac Surgery」と題して報告した(写真①)。患者さんは、心臓手術という非常に大きな壁を乗り越え、当院へ転院される。当院では、生活・栄養指導を含めたリハビリテーションの提供を心掛けているが、術後患者さんの生命予後を改善するためには、適切な薬物治療の調整が不可欠である。今後は、この点にもより積極的に関わっていきたい。



写真②

四半世紀以上ぶりに訪れたシンガポールでは近代化が進み、特にマリーナベイ・サンズに代表されるベイエリアには、洗練された近未来的な都市景観が広がっていた。アルコールが苦手ではない私たちにとって、学会発表の緊張から解放された夕暮れ時のひとときは、何ものにも代えがたい時間となった(写真②:マリーナベイ・サンズを望むテラスバーにて)。